

石仏調査ニュース

# ちがさきの石仏

第12号

発行

茅ヶ崎市教育委員会  
茅ヶ崎市文化資料館

編集協力  
文化資料館と活動する会  
(民俗行事部会)

連絡先

〒253-0055  
茅ヶ崎市中海岸2-2-18  
TEL:0467-85-1733  
e-mail:shiryokan@city.chigasaki.kanagawa.jp



## 石仏の施主銘「檀方中」

金子 栄司

萩園日枝神社のご神体は寛文二(一六六二)年の銘を持つ庚申塔である。塔正面にひげ題目を著わし、続けてやや小さめの文字で山王大明神と刻む。裾を広げた板碑型で下方に三猿を彫り出している。鍵の掛かったお社に祭られていて普段は間近で見ることができない。この度、常願寺住職や氏子代表の方々立会いの下、ご神体や収蔵品の調査が許され採寸や写真撮影を行った。

御神体の像容は資料館叢書3『茅ヶ崎の庚申塔』に詳記してあるが、施主の銘は「惣□□中」となっていて二文字読めていない。今回の調査で「且方」と読めた。「且」は「**且**」でくずし字である。「だんかた」と読むウェブページもあるが、辞書には対応する言葉はない。古語辞典では「だんぼう」だんと。広辞苑では「だ

んぼう」檀方・且方。檀家・檀徒」。ご神体の施主銘は「惣且方中」で「惣檀方中」のことである。

この調査の後、今宿地区の石仏補充調査で信隆寺の「題目塔(五百五十遠忌報恩謝徳塔)」に楷書で刻んだ「惣檀方中」の銘に出会った。「檀は檀(木篇、旁は面の下に且)」を用いている。常願寺と信隆寺は日蓮宗である。日蓮宗に多用される施主銘か。パソコンで「檀方」を検索してみると日蓮宗関係のものが多いが、他宗派でも檀方を用いたページが少し出てくる。

石川博司氏の「紀銘用語解説」の「施主銘」欄には施主を表す54種類もの銘が紹介されているが「檀方」はない。文化資料館調査研究報告18(2008)で報告した『茅ヶ崎の石仏』萩園・平太夫新田・西久保・円蔵」に記録した施主銘は23種類で施主11・

氏子中7・願主6・念仏講中2・道行2・惣□□中・惣檀方中・聰壇中・結衆・馬持中・本願主(題目講中)・本願人・本願・惣氏子・上氏子中・子待講中・庚講中・地藏講中・講中・下村中・建主・志主・氏子有志(銘のあとの数字は件数)。上記研究報告では壇(土扁)を用いたが実物は檀(木扁)である。用語として檀が正しい。

聰壇中・惣(実物は、異体字の「惣」)の、松の木篇が手篇、公のムが久、その下に心)壇方中は妙運寺(日蓮宗)の「題目塔(六百恩忌報恩塔)」に刻んである。現在までのところ惣檀方中・聰壇中などは日蓮宗寺院に造立された石仏に限られている。今後の調査でフォローしてみたい。



# 圭頭形板碑について

樋田 豊宏

## 一、圭頭形板碑について

圭頭形板碑は頭頂が三角になっていて、頭の部分・額が前に出ている。大きさは、2歳弱あり、信仰対象は一般大衆が中心である。年代は慶長から寛永・寛文頃までのものが多い。範囲は主として相模川西部にあり、三島にもある。約百基くらいであろうか。

相模川の東には十三基である。相模川西でも、北は厚木に三基、秦野に三基、西は湯河原・真鶴にはない。

三島も御殿場線沿線にはなく、沼津にもない。三島宿場中心にある。凝灰石製で石がわれやすいので、文字は大きな字で書かれ、宗教的にも統一されてなく、主尊も「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」「南無地藏菩薩」と書いてあったり、「設我得仏」「不取正覚」「三界万壽有縁無縁」「何以生」「空風火水地」等と刻み、今日流の「南無阿弥陀仏」だけのものではない。そして、その後の戒名の上文字「皈空」「還本」「帰元」「皈元」などがあつた。

碑の大きさは敷石に使われる石の大きさに

都合よく三尺・六尺位のものが多くあつた。

## 二、一国一城と圭頭形板碑

一国一城令は江戸時代になり、三代将軍家光の時に行われた。

三代将軍の在位期間は長かった。その子家綱はすんなり四代将軍に即位したと言われているが、実は三代将軍には嫡子がいなく、側女に産ませた子が四代になった。その家系のもものが、後に大岡家八代忠移の後妻に入っているため、墓碑に葵の紋が入っている。

三代家光の時に出された一国一城令が云々で、圭頭形板碑が出来たのが、その法令に従っているのである。

一国一城令は、元和元(一六一五)年に出されている。それより約三十年前に三島市のお寺に天正九(一五八一)年に圭頭形板碑が存在している。

私が調べた所では、静岡県三島に五基、相模に十五基の計二十基である。

三島にある五基の圭頭形板碑は、天正九年・慶長十二年・同十六年・同十九年のものがある。一番古い天正九年のものは、法令が出される三〜四年前に出来たものである。何の因果か同じ寺に南北朝時代、関東で流行った青石板碑があ

る。関東の型としては、三島のものが西端に位置し、三島市の指定文化財に指定されている。



三島市指定の板碑

ここまで紹介してきた板碑は、圭頭形板碑で、その頃には一般的な板碑も各地に併存していた。小田原付近や三島では墓碑が普及していたが、相模川の東側では一般化されず、承応・寛文年間頃のものが多く。

檀家に属していても、また墓石が普及しておらず、土饅頭(※)が多かったためであろう。この頃幕府の寺の本末帳が提出されている。そこで寺は石碑を造る事が多く、壇家に勧めたのであろう。

※土を饅頭のように小高くまるく盛り上げた墓や塚。

三 一城令以前の碑

- 1 三島妙行寺 天正九(一五八二)年
- 2 大友盛泰寺 慶長八(一六〇三)年
- 3 小田原常顕寺 慶長十(一六〇五)年
- 4 瀬郷加藤氏 慶長十(一六〇五)年
- 5 海老名寿閑寺 慶長十(一六〇五)年
- 6 三島長円寺 慶長十二(一六〇七)年
- 7 二宮密厳院 慶長十六(一六一二)年
- 8 小田原光明寺 慶長十六(一六一二)年
- 9 厚木法雲寺 慶長十六(一六一二)年
- 10 小田原海蔵寺 慶長十七(一六一三)年
- 11 永塚観音 慶長十八(一六一三)年
- 12 三島長円寺 慶長十八(一六一三)年
- 13 二宮密厳院 慶長十八(一六一三)年
- 14 海老名浄久寺 慶長十九(一六一四)年
- 17 三島円明寺 慶長十九(一六一四)年
- 16 南足柄西念寺 慶長年間
- 17 小田原願成寺 慶長年間
- 18 永塚観音 慶長年間
- 19 小田原福厳寺 元和元(一六一五)年
- 20 三島妙行寺 元和元(一六一五)年

一覧表の二番目の碑は小田原市大友にあり、慶長八年である。四番目のものは藤沢市瀬郷にあり、旧御所見地区のものである。五番目は海

老名市本郷にあるが、元は藤沢市瀬郷のものである。十四番目のものは海老名市門沢橋にある。以上は相模川の東側である。他は相模川の西側にある。九番目は厚木市のもの。十六番目は南足柄市のもの。

一番目の江戸時代以前の天正九(一五八二)年のものを除き、二〜六番目は江戸時代の一城令の発令前に作られている。七番目以降のものは、元和元(一六一五)年の一城令の発令を見越して、作られたものではないだろうか。

板碑が作られなくなったため、箱根・小田原・三島の石工は飯の食いあげとなり、他の生活を考えなくてはならなくなったであろう。  
※一城令発布は元和元年、將軍家光の時。

宝暦七年の約二五〇年前が

新たに見つかる

飯岡 英仁

場所は、市内西久保の、湘南東部総合病院敷地内、ほほえみ薬局の南側、平成十年頃、地主が土地を売却する際、屋敷内にあった宝暦七

(一七五七)年の石祠がそのままになっているものと思われる。

石祠には次の年号、銘が刻まれている。

(向って右) 宝暦七年 丑ノ六月吉日

(向って左) 西久保村 施主鈴木 吉右衛門



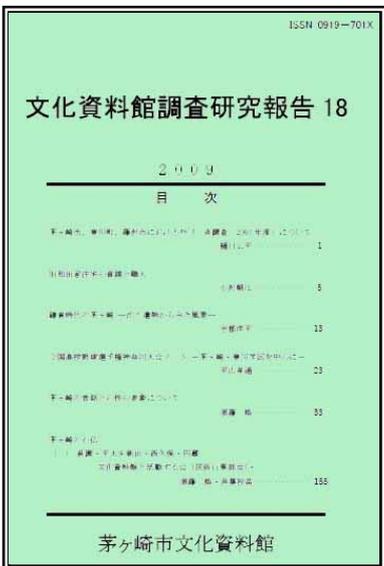


〔編集後記〕

今回も皆さまのご協力のもと、「ちがさきの石仏」第十二号を発行いたしました。ご寄稿いただいたものの多くは、石仏調査の活動を通して生まれた小さな疑問や発見によるものです。このように、この調査活動が、新たな探究心や知的好奇心のきっかけとなつていふことを感じ、大変うれしく思います。

昨年度行いました調査結果は、「茅ヶ崎の石仏(一)」としてまとめ、『文化資料館調査研究報告 18』に収録しました。こちらは、萩園・平太夫新田・西久保・円蔵の四地区にある石仏を、一つ一つ詳細に報告しています。

『文化資料館調査研究報告』18



文化資料館、生涯学習課にてお求めいただけます。価格：600円。

文化資料館では、「文化資料館と活動する会(民俗行事部会)」と協力して、平成八年より市内の石仏調査を行っています。現在は、個々の石仏の種類、造立日、形態、所在地、写真、銘文、スケッチ、寸法といった詳細な調査を行い、石仏資料の充実化を図り、再び調査を行なっています。

都市化が進む茅ヶ崎において、人々の信仰や思いがかたちとなった石仏たちを、この調査で記録・保存し、次世代に伝えることができると考えています。ご興味、ご関心のある方はぜひ、この活動に参加し、一緒に調査してみませんか。資料の整理は毎週木曜日、また石仏に関するフィールドワークなどを毎月第三金曜日に実施しています。

平成二十一年度は、矢畑・浜之郷・下町屋・今宿・中島・松尾・柳島の調査を行っています。皆様のご参加お待ちしております。

また、石仏新聞への寄稿もお待ちしております。

※記事の寄稿、ご不明な点等ございましたら、一面に記載しております連絡先にご連絡ください。